



「幻の安土城」復元プロジェクト・歴史セミナー

「安土山図屏風」研究の最前線Ⅱ

プログラム

13:30～14:30 『安土山図屏風』のスケッチをめぐって」竹本千鶴（國學院大學講師）

14:30～15:15 『安土山図屏風』を考える2」木戸雅寿（滋賀県文化財保護課参事員）

15:15～15:30 休憩

15:30～16:30 パネルディスカッション：「安土山図屏風」研究の最前線Ⅱ

パネラー：竹本千鶴

コーディネーター：木戸雅寿・松下浩（滋賀県文化財保護課専門幹）

日 時：令和6年（2024）10月26日（土） 13:30～16:30

会 場：コラボしが21 滋賀県大津市打出浜2-1

主 催：滋賀県（文化スポーツ部文化財保護課）

発行日：令和6年（2024年）10月26日

編集・発行：滋賀県文化スポーツ部文化財保護課

〒520-8577 滋賀県大津市京町四丁目1番1号

TEL077-528-4678 FAX077-528-4956 E-Mail castle@pref.shiga.lg.jp

URL <https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/bunakasports/bunkazaihogo/>

予告

Coming Soon!!



安土城築城450年に向けた

安土城考古博物館の展示リニューアルに御支援をお願いします！

(クラウドファンディング準備中)

11月上旬 スタート 目標金額1,400万円

はじめまして、安土城考古博物館です。

全国的な知名度を誇る「安土城」ですが、築城開始からわずか10年で廃城となったため、実像の多くが謎に包まれています。そこで滋賀県では、「安土城」の価値や魅力をより多くの方に知っていただくため、見える形での復元として「幻の安土城」復元プロジェクトに取り組んでいます。

「安土城」は令和8年に築城450年となる節目を迎えますが、これに合わせて安土城考古博物館は、「安土城・信長・戦国」をテーマとした博物館にリニューアルいたします。現在実施している、第一期展示リニューアル工事では、3つある展示室のうち第一展示室に、安土城天守と同じ八角形をしたシアターを設置し、フルCGで再現した安土城の映像を迫力ある5面スクリーンでお楽しみいただくこととしています。

今まで以上にみなさまに歴史や文化に触れ、お楽しみいただける博物館を目指してがんばってまいりますので、ぜひ、リニューアル工事へのご支援を賜りたく存じます。

まもなく、下記ホームページにてクラウドファンディングのご案内をさせていただきますので、ご理解・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



ご支援のお願い

11月上旬から検索、
またはQRのコードからご支援いただけます。

安土城考古博物館 レディーフォー



「レディーフォー」とは、クラウドファンディングサービスの提供会社です。

お問い合わせ先：滋賀県文化財保護課（三木） EMAIL : bunkazai@pref.shiga.lg.jp TEL : 077-528-4670

「安土山図屏風」研究の最前線Ⅱ

國學院大學文学部講師・竹本千鶴

「安土山図屏風」のスケッチをめぐる

□「安土山図屏風」のあらまし

制作:年は天正8年(1580)、注文主は織田信長、制作者は狩野永徳

外観:金地着色、城と城下町を正確に描写

出来:信長を満足させた

反響:正親町天皇の実見、所望

贈呈:「予の思い出となるよう」帰国するバリニャーノへ

用途:布教の成果としてローマ法王グレゴリウス13世へ献上

→イグナシオ・ダンチの地図のギャラリーへ

寸法:縦およそ120cm×横およそ240~300cm

(上杉本「洛中洛外図屏風」は縦160.6cm×横364cmの本間屏風、六曲一双)

名称:Nobunangaノブナンガ「日本の主要な都市」

現在:行方不明

□「安土山図屏風」とそのスケッチの動き

A、**「安土山図屏風」** 織田信長→狩野永徳へ作成を命令



アレックスandro・バリニャーノへ贈呈→天正遣欧使節に託す



グレゴリウス13世へ贈呈→地図のギャラリーに飾る



B、**「安土山図屏風」のスケッチ**

アブラハム・オルテリウス→フィリップス・ファン・ウィングへ地図の模写を依頼



「安土山図屏風」のスケッチおよび図書館での日本関係の調査
(1592年7月15日には地図のギャラリーへ)



同年8月中旬、フィリップス・ファン・ウィング急死



数年後、遺品は兄ヒエロニムス・ファン・ウィングへ



1607年2月トゥルネーのヒエロニムスを訪問、1612~23年頃、ペイレスク所持
重要!(1616年1月4日付けロレンツォ・ピニョリア宛ての手紙)



ピニョリアへ譲渡?提供?

→1624年版の刷見本、1626年版、1647年版「日本の神の神殿」として掲載、出版

(ヴェネツィア)

(パドヴァ)

(ヴェネツィア)

*ただし、フィリップス・ファン・ウィングのスケッチすべてではない

□「安土山図屏風」とそのスケッチはどうなったのか

- A、ローマ法王グレゴリウス13世の急死、地図のギャラリーの改装により所在不明
B、ヒエロニムス・ペイレスク・ピニョリアら人文主義者のサークル内の書簡などを調査
→たとえスケッチでも、ファン・ウィングの緻密さ正確さによって描かれたものなら、カタコンベの平面図が「学問の遺産」であるように、その資料的価値は高いであろう。

□参考文献

竹本千鶴「「安土山図屏風」を描き遺したフランドル人」(『日蘭学会会誌』57号、2010年)

ライデン大学東京事務所のウェブサイトで見ることができます<https://www.luot-nrg.jp/>

大橋喜之訳『西欧古代神話図像大鑑〔続編〕』(八木書房、2014年)

MARK K. ERDMANN AND ÉLIANE ROUX, 2023, :Recent Research on the Azuchi Screens, Journal of Asian Humanities at Kyushu University. vol.9

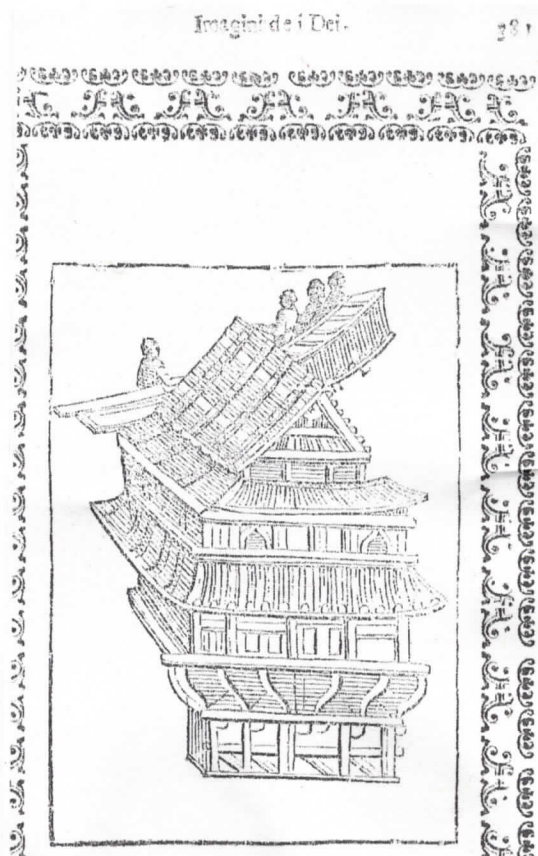
長崎歴史博物館『ローマを夢みた美少年』(2006)

小佐野重利『《伊東マンショの肖像》の謎に迫る』(三元社、2017)

杉森哲也「都市図屏風の成立と展開―日欧交流の視点から」

(『都市・建築・歴史5 近世都市の成立』(東京大学出版会、2005))

左 (86 ページ) : 資料2、右 : 資料3 (87 ページ) 1647 年版『古代の神々の偶像』に掲載された、ファン・ウィングのデッサンにもとづく「安土山図屏風」の部分



11.4 × 8.3 cm



Il già nominato Filippo Vvinghemio in certo suo foglio disegnò già i Templi d'alcune Detti Giapenchi, situati sopra alcuni alti rupi, & i detti templi d'habuerli Conati dalli Pittori, che gl'Ambasciatori Giapenchi portarono a donare à P. pa Gregorio XIII.

8.7 × 11.6 cm

かつて、かのフィリップ・ウィングが日本の神の神殿を紙にデッサンしたことは確実と見做されている。それは高い岩壁の上にある。彼は、日本の使節がグレゴリウス 13 世への贈り物として持参した絵画から、その部分だけを抜き出して描いたと記述した。

『安土山図屏風』を考える2



滋賀県 参事員 木戸 雅寿

1、信長が屏風を制作した意図

- ・ 信長は、当初からヴァリニャーノへの帰国の手土産とし贈呈する目的で屏風を作成し、屏風に価値を付加するために天皇の賛を得て贈った。(立花京子)
- ・ この屏風はローマ教皇への贈り物としてヴァリニャーノに与えられた。
(若桑みどり)

はたして、これはほんとうか？

屏風を制作している時期に、ヴァリニャーノの帰国話や遣欧使節を派遣するという事実は、なかったとおもうのですが？

◎バルトリー『耶蘇会史。日本の部』

「信長がワリニャーノ師への、其の愛情の記念として送った」

「(巡察師が)、その訪問から安土山に帰り、信長に別れを告げ、下の地方に出發する運びとなった時、(信長)はさらに大きい別の好意を示した。その一つは、一年前に信長が作(らせ)た、屏風と称され、富裕な日本人たちが、(独自の)方法で用いる飾り付けの布(バンノス)」を贈ろうとした。

◎『フロイス日本史』第52章 1581年8月14日

巡察師がまもなく出發することになったことを知ると、信長は側近の者を司祭に許に派遣し、「伴天連殿が予に会うためにはるばる遠方から訪ねて来て、当市に長らく滞在し、今や帰途につこうとするに当り、予の思い出となるも

のを提供したいと思うが、予が何にも増して気に入っているかの屏風を贈与したい。ついてはそれを実現した上で、もし気に入れば受理し、気に入らねば返却されたい」

巡察師は自らになされた恩恵を深く感謝し、それは信長の愛好品であるから、また特に安土山に関して言葉で容易に説明しかねることを、絵画を通じ、シナ、インド、ヨーロッパなどにおいて紹介できるので、他のいかなる品よりも貴重である、と返答した。

◎ヴァリニャーノ『日本巡察記』

「非常な遠方から予に謁見する為に来訪し、長く当市に留まり、予が与えた修院の地を大切にすの意向を示したことを感謝する。記念並びに親愛の印として何か贈り、帰国の際に携えて帰ってもらおうと思い、所蔵する品々に就いて考えてみたが、立派なものはすべて南蛮国から来たものであるから満足なものはない。ただ、バテレン等は、学院を絵に描かせる希望であろうかと考え、予の屏風を贈る。もしそれを見て満足なら留置ぐかよく、然らざれば送り返せ」

アレッサンドロ・ヴァリニャーノの年譜

1539 年イタリア・ナポリ生まれ。

1570 年司祭となる

1573 年東インド管区の巡察師となる。

1574 年 3 月リスボンを出航。9 月ゴアに到着。

日本をインド管区から独立させて準管区とする指示を受ける。

天正 7 年 1579 年 7 年 25 日に肥前口之津に到着。

1580 年 6 月「日本布教長規則」を定め、豊後・九州・都の 3 教区に分けそれぞれに教区長を配置。各教区に Casa(カザ)を置き、Residencia(レジデncia 司祭館)を設置=安土

天正 8 年 1580 年閏 3 月信長から屋敷地を賜う。4 月カザの建設開始。

1580 年 5 月 安土のカザにセミナリヨを併設。地所を拡張。

1580 年 7 月、長崎の司祭会議に向かう。

天正 9 年 1581 年 3 月 29 日、本能寺で信長と面会。

4 月京で馬揃え。

4 月 14.15 日、安土山を訪問し信長と面会。教会と修道院建

設の準備に入る。

6月～ 安土滞在。

7月に都地区の協議会を安土で開催。

8月14日 孟蘭盆会で信長と対面。屏風をもらう。

秋、日本布教長カブラルを解任。ガスパール・コエリヨを任命。

12月長崎で会議を開催。

天正10年1582年1月天正遣欧少年使節の企画を発表

2月使節出発。ゴアまで同行。

6月本能寺の変でのセミナリヨの灰燼と信長の死を知る。

天正10年1582年12月31日、定航船でマカオを出航。

天正11年1583年1月27日、マラッカに入港。

天正11年1583年2月4日、出航してインドを目指す。病苦にあえぐ日本使節の看病をしつつ、セイロン島コロomboに辿り着き、対岸のインドに到着。復活祭を迎え、駕籠で炎熱の道を辿り、クーランから小舟に乗り、コチンに着いた。

天正11年1583年4月～10月末まで順風を待った。

その間、使節等はポルトガルの海外発展史や、インドに於けるイエズス会の事業に就いて教えを受けた。ヴァリニャーノは、日本巡察の報告書「日本要録」の執筆に専念していた。

天正11年1583年10月20日、ローマのイエズス会総長クラウディオ・アクアヴィーヴァから、ヨーロッパに帰らずインド管区長として現地に留まるようにとの指令に接した。彼はコチンから、ゴアのインド副王ドン・フランシスコ・マスカレーニャスに宛て、予め使節等の到着を知らせた。

天正11年1583年11月26日付、総長は教皇から認可を受け、ヴァリニャーノに通告。

天正11年1583年12月12日、ヴァリニャーノは、管区会議を開催し、使節と同行して渡欧できなくなったのでヌーノ・ロドリゲスを代表者に任じ、詳しい指令を与えた。

天正12年1584年2月20日、長崎を出た二周年の記念日に「サンティアゴ号」に乗船してリスボアを目指した。一行はアフリカを迂回してサンタ・エレーナ島

8月11日、リスボンに入港した。日本使節等は「及ぶ限りの愛と慈しみを以て」イエズス会士から歓迎された。

ヴァリニャーノは、使節派遣の結果を嘆いていた。

天正 18 年 1590 年、帰国する使節をゴアで迎え、来日。

慶長 8 年 1603 年、最後の巡察を終えマカオに帰国。

慶長 11 年 1606 年、マカオで没する。

【ポイント】

- ・屏風はヴァリニャーノのが安土を訪れる 1 年も前から制作されていた。天皇から賛を得たのはこの時点で完成していた(天正 8 年 8 月)¹
- ・1581(天正 9)年 3 月 24 日(2 月 20 日)信長は、入京した本能寺で。在京の日本人修道士ロレンソから、はじめて巡察師ヴァリニャーノの存在を知った。
- ・ヴァリニャーノに初めて今日で対面したのが、(天正 9 年 3 月)
- ・ヴァリニャーノが帰国するという報せを聞いて、何か思い出となる物を贈りたいと考えた。
- ・信長が何にも増して気に入っている屏風を贈与したいと考え、もし気に入れば受け取ってほしい。気に入らねば返却してね。(天正 9 年 8 月)
- ・ヴァリニャーノは、深く感謝し、信長が大切にしていた品。自分が見た安土山が描かれているから、言葉で容易に説明できない姿を、絵画を通じ、シナ、インド、ヨーロッパなどにおいて紹介できるので、他のいかなる品よりも貴重だと、信長に返答し受け取った。

安土城をヨーロッパに広めるために屏風を作らせたものではなく、そのためにヴァリニャーノに持っていかせたものでもないことがわかる。純粹に大切にしていたものを土産に渡した。

ヴァリニャーノ自ら、使節団に託し、布教の成果に使用した。使節団は九州諸侯の使節である。

2、 屏風には名前がない

当時の記録には、屏風の名称がありません。

Beobi バルトーリ『耶蘇会史・日本の部』

Biobo イエズス会ガスパール・ヴィレラ 1571.10.6 ゴア発書簡

Biombos 『フロイス日本史』

これでは研究に支障があると付けられたのがこれらの名前 研究用語。

- ・「安土山屏風」 濱田耕作 「安土山屏風について」『仏教美術』(1931)
- ・「安土城之図」屏風 滋賀県の屏風探索(1984)
- ・「安土城図」若桑みどり『クアトロ・ラガツィー天正少年使節と世界帝国』(2003)
- ・「安土城之図」近江八幡市プロジェクト (2005)
- ・「安土図屏風」竹本千鶴『「安土図屏風」を描き遺したフランドル』人』(2010) 日蘭学会誌
- ・「安土城図屏風」榊原悟『贈呈屏風の研究』概要 早稲田大学学位論文
- ・「安土城図屏風」、「安土山図屏風」橋本麻里(永青文庫副館長)『芸術新潮』(2018)
- ・「安土城図屏風」「杉元博司と探す 安土城図屏風探索プロジェクト」(2018)
- ・「安土山図屏風」滋賀県安土城復元プロジェクト(2019)
- ・「安土山図屏風」新保淳乃「安土山図屏風のゆくえ」(2022)

3、 屏風の作者は誰か？ 実はよくわかっていない

「あつちのていかのけん七郎にひやうふかゝせて、のふなかけさんに入る」
(安土の躰、狩野源七郎に屏風、描かせて、信長見参に入る)

天正8年8月13日(『御湯殿上日記』)

狩野松栄：通称源七。 永徳の父

狩野永徳：通称源四郎。松栄の長男

永徳(濱田耕作、若桑みどりは永徳とする)ではなく、父の松栄の可能性が高い。
(立花京子『信長権力と朝廷』2000)

日記の誤記であると主張する研究者もいる。

いずれにしても、狩野一派の作であることは間違いがない。

安土城天主の襖絵は、狩野父子が書いたとされている。

天主完成は、天正7年5月。その後、屏風制作に携わったことは間違いがない。

名・落款は果たしてあるか？

4、屏風には何が描かれていたか

「それは金色で、彼らの間できわめて愛好される(風物)が描かれている。彼はそれを日本でもっともすぐれた職人に作らせた。その中に、城を配したこの市を、その地形、湖、邸、城、街路、橋梁、その他万事、実物どおりに寸分違わぬように描くことを命じた。この制作には多くの時間を要した」『フロイス日本史』第52章 1581年8月14日、1582年2月15日長崎発、イエズス会総長宛ガスパール・コエリヨの手紙『イエズス会日本報告書』第3記第6巻 P59-60

「其の一つには、新しい都市と、他の一には安土山の不落の城を筆を持って描いた。」バルトーリ『耶蘇会史・日本の部』

「信長がそれに寄せる愛着であった。内裏はそれを見ようとして、彼に伺いを立て、気に入ったので譲渡されたい、と伝えたが、彼はとりあわず、その希望(をかなえること)を回避した。」

5、正親町天皇は何を記したのか。

「のふなかけさんに入る。しゅんちやうけんもたせてまいる。こよひはこなたにをく。」天正8年8月13日(『御湯殿の上日記』)

(信長見参に入る。春長軒=村井貞勝持たせて参る。今宵は此方に置く。)

「昨日のひやうに。ちよくしょをと申しまゝ。あくひつをそめいたすつかいくわんしゅう寺中納言。ひのゝしん中納言文をもちてのふなか所へゆく。」

天正8年8月14日(『御湯殿の上日記』)

(昨日の屏風に。勅旨をと申すま。悪筆を染め致す、使い勸修寺中納言。日野の新中納言、文を以て信長の所へ行く。)

はたして、正親町天皇は何を記したのか。

※賛(さん) 絵を見て、その絵に対する評価を絵の余白に書いたものおもに掛軸が多い。天皇の賛は少ない。

6、 屏風の形と大きさ誤(解されている方が多い)

このような一般的にイメージしているような、サイズ形の屏風ではないのではないかというのが近年の見方。

「Beobi と呼ばれる二枚の装飾の(薄膜=直訳)であった。・・・

其の一つには、新しい都市と、他の一には安土山の不落の城を筆を持って描いた」 バルトーリ『耶蘇会史・日本の部』

▣濱田耕作は、一隻＋一隻とした。

▣岡本良知は、「本間屏風一双」とした。

一對という時イタリア語は複数形を使うが原文では「一(幅)の額そうした絵」として単数となっている。(ウルバノ・モンテ)

「高さは二ブラッチャ、横幅四(ブラッチャ)」のものであった。

ブラサ・プラザはスペイン海事の単位。人間の腕の長さが単位。(海事の場合は3倍する)、1ブラッチャ=58 cm

7、 遣欧少年使節の献上

「安土山、都、堺、豊後において、この屏風を見ようとして集まった人々の数はすこぶる多かった。そして一同の希望を満たせ、男も女も自由に見物できるためには、それを教会(内)に展示せざるを得なかった。」『フロイス日本史』第52章『イエズス会日本年報』1582。2月15日コエリヨの手紙

屏風の存在は市中の話題であった。ヴァリニャーノが信長から屏風を受け取り

九州へ向かう帰路の泊ごとに、一般の展観しなければならない程の騒ぎであ

ったらしい。

1585 年 4 月 3 日 遣欧使節の苦難の巡礼の結果。最終的に教皇グレゴリオ 13 世に献上された。

使節は、「安土山図屏風」以外にも、数多くの日本の品を持参し、各地の有力者等に献上している。屏風は他に「救世主図屏風」・「キリスト受難図屏風」の二つのを持っていた記録が残されている。

8、 屏風探しの旅 ―忘れ去られる安土山図屏風―

◎岩倉具視使節団の功績

禁教し、国を閉ざしていた江戸時代において、信長時代にイエズス会との交流の中で屏風がバチカンに届けられていたことは忘れ去られていた。

明治維新を迎えて、西欧との立ち遅れを取り戻すため、政府は明治 4 年(1871)11 月 12 日～明治 6 年(1873)9 月 13 日まで、12 か国に岩倉具視を特命全権大使とする 107 名の職員を派遣し、政治・経済・科学・教育・文化を学ばせた。

ヨーロッパでは、イギリス・フランス・ベルギー・オランダ・ドイツ・ロシア・デンマーク・スウェーデン・イタリア・オーストリア・スイスを訪問。帰国後、それを『米欧回覧実記』としてまとめる。「観光」=その国の光る部分を観る事。

イタリアでは、遙か戦国時代に日本人遣欧使節が屏風を持って訪れ交流したことを知り感動する。

◎村上直次郎による功績

帰国した岩倉は、帝国大学の村上直次郎博士を呼び、日本とイタリアとの交流を示す文書の悉皆調査をすることを命じる。

留学先で数多くの資料にあたり、バチカンの屏風のことを知る。以後派遣される留学生は、村上の後は焼け野原で、彼の足跡をなぞるだけだったという。(今も繰り返している)

帰国後、『耶蘇会史日本通信』、『イエズス会日本年報』などを翻訳し発刊。
これを契機に東京史料編纂所が設置される。

その資料調査の過程でエボラ屏風を発見する。

◎エボラ屏風の発見

1960年、松田毅一はポルトガルのエボラ図書館で壊れた屏風を調査。

一時、これが安土山図屏風の残骸ではと疑われた。

本紙はなく下張りから、多数の古文書を発見されている。

古文書は、1580年～1587年に京都の教会にあった文書が使われたことが判った。

その中に、オルガンチーノの文書と共に安土や高槻の教会でヴァリニャーノが作成した講義テキストなども見つかった。

◎『大坂城屏風』の発見

オーストリアのグラーツ市にあるエッケンベルグ城(神聖ローマ皇帝フェルディナント2世の政治顧問公爵ハンス・ウイルリッヒ・フォン・エッケンベルグが1625年に築いた城)。

平成18年9月に城の壁の装飾から発見された。

第二次世界大戦の折、ソ連軍に占領されたが壁と一体化していたため外されなかった。インドの間の解体修理で取り外され屏風である事が確認された。

※参考文献

「安土セミナリヨ」再考 木戸雅寿 『滋賀県立大学考古学研究論集Ⅰ』

2021 滋賀県立大学考古学研究室

「エボラ屏風の謎」 木戸雅寿 『淡海考古学論叢』

